



竹久夢二
自伝画集

出帆

昭和三十三年十月一日 印刷
昭和三十三年十月十日 発行

定価八百円



著者

竹久夢二
たけひさゆめじ

著者

澤田伊四郎
東京都千代田区九段四ノ一三

発行所

龍星閣

東京都千代田区九段四ノ一三
振替口座東京三三六
電話九段(調)九二七二

出

帆

小汚い洋服を着た一団の行列が、色んな思い付きの旗を押立てて、隊伍肅々と練ってくる。

「パパ、何？」

三太郎の息子の、その頃小学生だった山彦がパパの手にすがりながら訊いた。

「さあね」

パパの三太郎も、いささか驚いて立止まって行列がくるのを待っている。

行列の側には多勢の巡査が職務のために興奮して、行列について歩いていく。

行列は多様な服装にも拘らず、整然と感情を押えて、一糸乱さず一つの意志に向って歩いてゆくように見えた。

「五月祭^{メイヂ}の行列だ」

「五月祭って何だよ」

「五月祭ってのはね。そうさ労働者が花の咲いた野原へ行って、歌を歌って踊るのだよ」

「ふうん」

三太郎は、その日暮しの自分の生活に草臥れて、彼が二十代に抱いたような社会意識などは、もはや、忘れていた。新聞の嫌いな彼は、今日の五月祭のことすら知らなかった。

三太郎親子はあっけにとられて、ぼんやり群衆に押されながら立っていた。と突然、一人の泥で作った金平糖のような顔をした大男が現れて、三太郎親子の前へ真黒く立塞がった。

「なんて草臥れた汚い下駄をはいた男だ、この金平糖は」

その男と連立って歩きながら、三太郎はそう思った。



2

五月祭 2

一段高い所に坐った髯を生した金平糖は、K新聞と三太郎の顔を見較べている。

「こいつに違いないんだがね。日本人だね、これはどうも」

泥の金平糖が、髯の金平糖にきく。

人間は互に理解出来ないものを怖れる、というが、三太郎は全くこの金平糖の仲間を理解することが出来ないで、理屈なしに子供じみた不安の念から、何事が起るのか、金平糖の顔の中を探していた。

先方もこっちを理解出来ないらしいのだが、それでいて、こっちを怖れている風もないのは不思議だった。実は内心少なからず怖れをなしていたのかも知れなかった。

「お前はロシアから来たエロウペエパアという人間か」

最上の威厳をみせながら、髯の金平糖が訊問した。

「いいえ。何故です」

「何という名か」

「僕は山岡三太郎です」

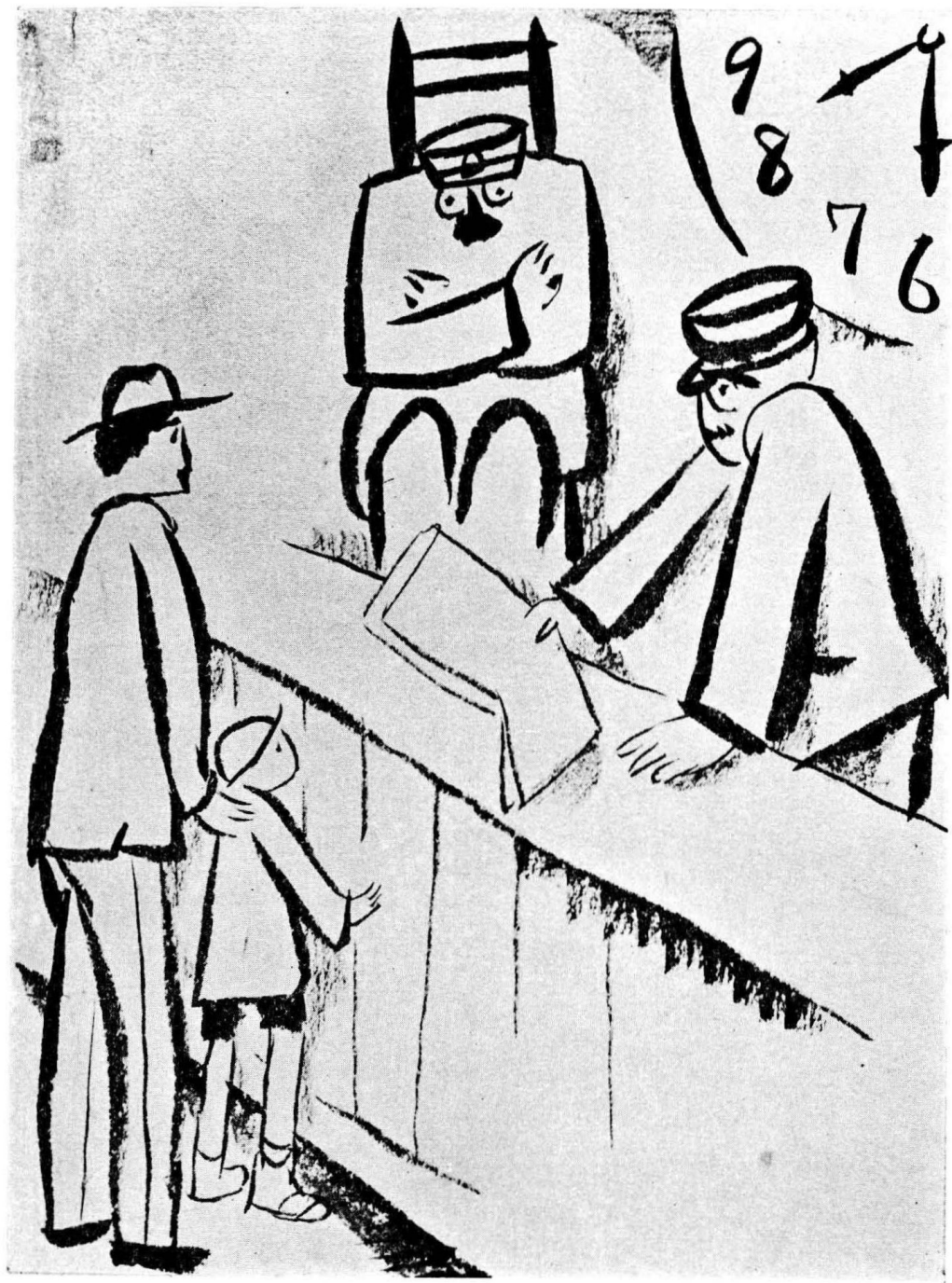
「はてね。この新聞に載っている写真はお前の写真だ。そうするとお前がロシアから来たエロウペエパアになるんだ」

「とんでもないことになりましたね。一寸その新聞を僕に見せてくれませんか」

三太郎は金平糖の手から、五月一日発行のK新聞を受取って見た。

なるほど、今日の五月祭に加わるロシアの盲詩人エロウペエパア氏として、その肖像は正に山岡三太郎の顔が大きく引伸して載っているのだ。

由来金平糖は、人を疑うことを職業としてきたが、曾て自分を疑ったことはない。いまこの男がロシア人でなくて日本人だとすると自分の眼を疑わねばならなくなる。



三太郎もまだ二十代の青年の頃には、芸術家的敏感から、地上にユウトピアを持ちきたす夢を信じていたものだ。

バラライカを弾きながらロシアのステップの民謡を歌ったり、レイニンの出現を予言していたその頃の詩人エロウベエパアは赤いトルコ帽をかぶった仲間だった。

気のよい三太郎もあんまり馬鹿らしい間違いに怒ることも笑うことも出来ない、泥水のしみた靴をはいたような気持で、山彦の手を引いて、ほんと太陽の光の中へ出て来た。

金平糖は、一人の善良な市民を何かに認めたのだった。認めた以上いかなる処置をとることも許されているのだから、認められたものが、その偶然のかかりあいをあきらめることになっていた。

三太郎には、争うとか主張するとかいう気性が欠けていた。共存共栄を標榜しながら、スポーツの意気で突進する近代生活に向かない人間だった。テニスやピンポンのような競技をやるにしても勝敗の意識よりも、経過のファインプレーを悦ぶといった方で、花札を引いても桜のピカが手にあればきつと出るし、馬に乗っても走っている間だけを喜んだ。だが何をやってもへまで、結局損をした。

「我々は愛すると誰でもが言う、しかし同じ言葉でもそれぞれ内容が違っていることを知らねばならない」

エロウベエパアが日本を追われて、北方支那へ去る送別会の席上でいった言葉を、三太郎はふと思出した。

「どこへ行く」

今日は、三太郎の息子の山彦の誕生日で、そのお祝いにどこかへ出かけるところだった。



「最初の結婚を躓くと、一生うまくゆかないのですな」

世間を見て来た人はよくそういうが、最初躓くような人間は、一生躓くようなどこかに痼疾があるのに違いない。そういう不幸の前には、経験なんかは何の役にも立たない。こりずにおんなじような失敗を繰返している人間を見てもわかる。

「くせだね」

癖がつくのではなく、そんな不幸な体質に生れついているのだ。

三太郎の最初の細君は、三太郎が耕の着物に大名縞の袴をはいているような画学生時代に、一緒にあった。彼より一つ二つ年上の女だった。姉さんごっこが少しこじれてくる頃までに、どさくさ八年の月日は流れ、彼女はもう三人の男の子を生んでしまっていた。

「あなたは本当に私がいやなんじゃないの、そうだったら、子供なんかいつでも始末つきますよ」
家庭生活の競技もだんだんもう決勝点に近づいて来たのだった。勝敗を眼中におかないくせに、勝敗を向うからきめられることを好きでない彼は、外国へ出かける計画をたてた。彼女と子供のために、下町の方に小さな美術店を出させて、旅行券を求めている矢先に、欧州戦争が始った。それを口実に、一つには彼の不精からと、また彼女と別な家に住める心安さから、外国へ出かけることをやめにして、のうのうと納ってしまった。

それと見てとると、彼女はまた、彼を競技に起たせようと、やって来た。

「もうわたし店なんかいや、やっぱりみんな一つの家で暮らしましょうよ」



5

黒船屋 2

店は店、三太郎の画室は画室、彼女と子供達は子供の家と、別々に住むようになってから、その三番目の子供は生れたのだ。三太郎はびっくりして、生れて七日ほどたった頃、赤ん坊を見に子供の家へ出かけたが、子供好きの彼も、この子はどうも頼べたをつつく気にもなれなかった。

彼女は赤ん坊を背負って、彼の後を、店から画室へ、画室から店へと、追かけてきては「子供の世紀」を説いてきかせるのだった。

三太郎は子供を中心にした家庭生活などに興味がなかった。三太郎はその頃、子供の雑誌へ絵を描いている殆ど唯一の絵かきだった。

「君は一つ子供のための絵かきになってくれたまえ」と日本の子供の父と言われる児童文学の大家からすすめられたが、まだ外の仕事に執着がありすぎた。いや彼は何にでも興味が持てていろんな仕事をやってみたいたちだった。黒船屋で売る浴衣や帯や半襟や木版画やその他小美術品のデザインや加工にさえ、なかなか興味を持っていた。彼の読者で田舎の呉服屋の息子が出てきて、黒船屋の世話をやいてくれるので、三太郎は、よく店へ出かけてゆくので自然友達が集ってきた。

学校の帰りに黒船屋へ寄る学生の中に、三太郎に特別な興味をもった娘があった。笑うと糸切歯の見える娘で、手も美しかった。

「これは芸術家の手ですね」

「あたし絵をやって見たいと思いますの、まえに×先生のとこへ通ったことがあるんですが日本画なんでしょう、ですから、先生時々あたしの絵を見て下さいませんか」

「僕でよかったら、見るだけ見ましょう」

三太郎も彼の細君も、明るいこの娘をすぐ好きになった。



「わたしは子供のために生きてゆきますわ。あなたの芸術のためには、やっぱり吉野さんのような人が必要なんです。吉野さんを貰いましょうよ、そしてみんなで暮しましょう」

三太郎の細君は、冗談ではない、本当にそう思いつくと、吉野というその娘の親の許へ出かけていって「わたしの良人のお嫁さんに娘さんを頂きたい」と言つたものだ。

三太郎がいくら好い気になって見ても、一人の男と二人の女が、一つ家に寝起きする場面を想像することはたまらなかった。

三太郎は、とうとう京都へ逃げ出した。すると三太郎の後をすぐ電報が追いかけて来た。

「ミサヲニゲタ、ヒコハソチラヘオクル、サンキチハタヘクレテヤル、ショウチカヘン」

ミサヲは細君の名だ。ヒコは次男の山彦の愛称、サンキチは三番目の赤ん坊のことだ。上の子はその頃田舎の爺さん婆さんの許へ預けていた。

三太郎が先生と呼んでいた人の夫人が、近所に住んでいて、何くれと世話をやいていた。後から聞いたことだが、その頃五つだった山彦が赤ん坊を背負わされて、母親の書置を持って泣いていたそうだ。母親が行った先のある会の主事と夫人とが相談のうえのそれは電報だった。

「シカタガアリマセン、バンジヨロシクオマカセシマス」

そう返事をした三太郎は、これで彼の最初の細君との縁も切れ、三番目の子供とも他人になった。従って黒船屋の店も閉じて、すべて細君にくれてやってしまった。これで三太郎の東京の生活も、一まず幕になった。



三太郎親子の京都の生活は、孤独で貧しくはあったが、自然の風物と季節の饗宴とのなかに悠々自適した長閑な生活であった。冬の間には北陸山陰の温泉場を渡り歩いたり、春になると、彼が生れ故郷の瀬戸内海沿いの禿山の間の白い村だの、鉄道が出来てさびれた港などを訪ねて見た。京都奈良の神社仏閣はじめ、竹藪や松林や、殊に築地だけ残した屋敷跡などを探して歩くのは、なかなか楽しみだった。

季節の変り目には、素朴な木版刷のピラが湯屋とか茶屋の軒先に貼られるのも興味があった。東山松茸狩、高台寺の萩、鞍馬の火祭等々。また町家や寺々で行われる古風な年中行事や祭礼に、中京あたりの女房たちが季節の装をこらして坂を上ってゆく姿なども、三太郎を喜ばせた。

しかし三太郎の京都での暮し向きは、そののんきにゆかなかった。住みなれた東京の生活と違って、こちらは世間がせまく、隣附合もすべて小うるさかった。

「……しかしとにかく、京都にしばらく住んで見る気になりましたよ。友達の話で高台寺辺に紅がら塗の家を一軒借りました。家具調度も一通り、食べて寝るに不自由のないだけ買いあつめ、女中も友達の家から一人借りてきて、まあ、とにかく親子二人がたきたての飯を食べられるようになったわけです。ここで少し腰を据えて、古いものも見たり製作もして見たいと思います。北山嵐に鳴る八坂の塔の風鐸が、いやに佻しいのにもすぐ馴れるでしょう、もうすぐ春も来るでしょう」

そんな手紙を、東京の吉野の所へも書いた。